

召天者記念礼拝

2024年9月15日(日) 午前10時30分

司式 牧師 姜 徑米

奏楽 河野和雄

前 奏

招 詞 ヨハネによる福音書 7章 37b～38 節

讃 詠 5 4 6

主の祈り

聖 書

詩 編 130 編1～8 節 (旧 973)

ローマの信徒への手紙 1 4 章 7～9 節(新 294)

祈 禱

使徒信条

讃 美 歌 3 6 1

説 教 「生者と死者の主」

牧師 高橋和人

祈 禱

讃 美 歌 II 1 3 6

献 金

頌 栄 5 4 1

祝 禱

後 奏

起立が困難な時は着席のまま礼拝します。
礼拝は前の方から静かに着席しましょう。

9月の祈り

主の選びとみ救いに与り、主と共に歩んだ信仰の先達たちを覚え、残された人々に主の復活によって明らかにされた、真の命の希望と慰めが与えられるように。

伝道が力づけられるように。秋の諸行事が守られるように。

夏休みを終えた子どもたちの心と体が守られ力づけられるように。

今日の祈り

天の父の右に座しておられる主イエス・キリストに結ばれ、召された兄弟姉妹を覚え、復活の主の信仰を受け継ぎ伝えることができるように。遺された人々に上よりの慰めがあるように。

災害の被災者が力づけられるように。戦火による被害と痛みが和らげられるように。平和と復興が与えられるように。

「生者と死者の主」 高橋和人

ローマの信徒への手紙 1 4 章 7～9 節

召天者記念礼拝を迎えた。教会の信仰の命は既に召された人たちによって繋がれてきた。それは実に様々だ。それぞれの生きた時代と境遇、関わった人々と出会い。同じ時代に生きたとしても同じものは一つもない。

人として生きることは違いがあり皆固有のものだ。それは、様々な印象を残す。その人らしさは、好ましいことだけではない。良い思い出があり、逆に引っ掛かったままのことがある。こだわりがあったり、受け入れがたいことさえある。親しければこそ、そのとげを思い起こすことがある。しかし、そ

れさえその人そのものと言える。

そのような人々が教会の信仰の歩みを形成してきた。天にある聖徒たちであるが善人や聖人なのではない。しかし、信仰においては真剣だ。

人は死によって失われ、その姿が過去のものとなっていることだ。死よりも強いものはない。あらゆるものを無にし、消し去ってしまう。自分が無になる恐怖がその正体だ。

キリスト者の死が違うのは「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。」と言われる。自分のために生きることは空しい。ましてや死はさらに空しい。そこには神と隔絶した罪がある。

キリスト者は救いによってその生と死が変えられた。「生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」と。生と死が変えられるのは「主のため」に「主のもの」キリストのものになること、自分の命を捧げることだ。召されることは捧げること。

自分と主イエスの間には、途方もない隔たりがある。主の死はそれを打ち破られた。自ら人の死を負ってくださった。信仰はそれを受け入れる。そのためには、主イエスを主として、その御支配に従うことが必須だ。

教会が死者を記念するのは召されて主のものとされたからだ。教会は生きる時も、死ぬ時も唯一の慰めは自分が自分のものでなくキリストのものだということを知っている。信仰は厳しい。それほど、慰めと恵みは大きい。